

## パリ入市式とピエール・グランゴール

平手友彦

ヴィクトル・ユゴーは『ノートルダム・ド・パリ』の「パリ鳥瞰図」でノートルダム大聖堂の塔の上から1482年のパリを眺めている。この小説を書いたのは1830年代初頭だから350年ほど遡ることになるのだろうか。おそらく19世紀初頭でもその眺めは素晴らしかっただろうが、14世紀末のプロワサールもノートルダム大聖堂の塔の網渡りは「パリから二、三里離れても見えた」<sup>1)</sup>と書いたから、当時の眺めも格別だったに違いない。今でも地上69mの塔に上がることができればパリを全貌できる（写真



「ノートルダム大聖堂の塔から見たパリ北の景色」<sup>2)</sup>。手前の大きなパリ市立病院はユゴーの時代にはこの位置になかったし、遠くモンマルトルの丘のサクレ＝クール聖堂もまだ姿を現していないが、セヌ川を渡った右岸のサン＝ジャックの塔は、「サン＝ジャック＝ラ＝ブーシュリ教会の四角ばった見事な塔」<sup>3)</sup>とユゴーも書いたようにひときわ高かったはずだ<sup>4)</sup>。このサン＝ジャックの塔のすぐ横に、今ではバス駐車場と化したシャトレの広場があるが、そこを起点としてサン＝ドニ通りを北に走るとかつてのパリ城壁のサン＝ドニ門がある（ただし今あるサン＝ドニ門は1672年に建てられたものだ）。このサン＝ドニ門、サン＝ドニ通り、サン＝ジャック＝ラ＝ブーシュリ教会、シャトレ、そしてこのノートルダム大聖堂はいずれも中世からルネサンスにかけて王と王妃のパリ入市式の舞台となった場所である。

16世紀の王と王妃の入市式に携わったのは『ノートルダム・ド・パリ』に「ピエール・グランゴール」Pierre Gringoireとして登場する詩人ピエール・グランゴール Pierre Gringore である<sup>5)</sup>。グランゴールが関わったパリ入市式は少なくとも六回ある。しかし、その内容が具体的に記録されたものは、1504年11月20日アンヌ・ド・ブルターニュ王妃、1514年11月6日マリー・ダングルテール王妃（メアリー・テューダー）、1517年5月12日クロード王妃の入市式のみで、あとの三つ（1501年11月25日フィリップ大公、1502年2月17日教皇特使ジョルジュ・ダンボワーズと1515年2月15日フランソワ1世）については、シャトレにおける舞台製作で100（あるいは115）リーブルがグランゴールと「大工」ジャン・マルシャンに支払われたこと

だけがパリ市出納記録に残る<sup>6)</sup>。このパリ市出納記録には、1504年のアンヌ・ド・ブルターニュ王妃、1514年のマリー・ダンゲルテール王妃、そして1517年クロード王妃の三回の入市式についても、同様にシャトレの舞台製作で100（あるいは115）リーブルが支払われたことが記録されている<sup>7)</sup>。要するにグランゴールが大工マルシャンと舞台を上げた記録としてパリ市に残るものはすべてシャトレに対しての報酬ということになるが、グランゴールは1514年のマリー・ダンゲルテール王妃の入市式の「記録」としてマリー妃に献上した写本の献辞で「フランス財務殿とパリ市の殿方より王妃陛下の入市式の舞台を製作するよう依頼を受けた<sup>8)</sup>」と書いて、ここにシャトレの限定はない。また、パリ市出納記録にはこれらの入市式についてグランゴールとマルシャン以外に報酬が支払われた記録はない。パリ市がシャトレの舞台への報酬として二人に支払った記録は、彼らがシャトレ以外の舞台に関与しなかったことを意味するのだろうか。それともグランゴール自身が言うようにグランゴールは入市式全体の製作者だったのだろうか。グランゴールが関わった可能性のある舞台は、入市式の順路でいえば、サン＝ドニ門①からサン＝ドニ通りを入れて、ポンソーの泉②、トリニテ③、かつての城壁の絵師たちの門④、聖イノサン⑤を經由してシャトレ⑥に至り、セヌ川をグラン・ボンあるいは両替橋で渡って、ノートルダム大聖堂から王宮前⑦に帰着する七カ所である（地図「三人の人物がいるブロン<sup>9)</sup>の地図」部分）。そもそもかつての入市式ではこれらの場所でどのような舞台が作りあげられたのであろうか。



地図 「三人の人物がいるブロン<sup>9)</sup>の地図」部分

ジャン・フロワサールがその『大年代記』に1389年8月20日のシャルル六世妃のイザボー・ド・バヴィエールの入市式を書いている。おそらくこれがパリ入市式の舞台を具体的に知ることができる最も古い記録であろう。それ以前には、フィリップ六世（1328年6月18日）、ジャン二世善良王（1350年10月17日と1360年12月13日）、シャルル五世（1364年5月28日）とシャルル六世（1380年11月11日）の入市式が行われたが、何れも簡単な記述しか残っておらず入市式の舞台を詳しく述べたものはない<sup>10)</sup>。

1389年のイザボーは婚姻から4年を経て三人目の子を待ってのパリ入市である。王妃はその後伝統となるサン＝ドニ門からパリに入る。門には大きな天蓋が架けられ、中で天使姿の子どもたちが旋律豊かに歌う。胡桃の玩具で遊ぶ子を抱く聖母の図像もあって、天空にはフランス王国とバイエルン公国の紋章が、フランス国王を表す黄金の太陽に向けて掲げられている<sup>11)</sup>。次のポンソーの泉は、黄金の百合が描かれた紺碧の布に覆われている。泉を囲むように柱が立っており、歴代のフランス王の紋章が飾られている。この泉からは「クレレ」（蜂蜜と香辛料をワインに混ぜた飲み物で「イポクラス」に似る）と「ピマン」（これも同様の飲み物）が迸り出て大きな流れを作る。泉の周りでは黄金の帽子を被り着飾った娘たちが歌っている。トリニテの舞台には城があり、サラディン王の部隊とキリスト教徒の部隊が対峙している。数の上で劣勢のキリスト教徒側にフランス王がいて、その周りを十二臣が囲む。王妃一行がその前に来ると劇が始まり、サラディン討伐を願い出たリシャール王がサラディン軍と激しく戦闘する。絵師たちの門には、金糸で星が鏤められた天幕が張られて、父と子と聖霊の姿が描かれている。天幕の中では子どもたちが天使姿で歌う。王妃がこの門を通過する時、その天使が二人やってくる、美しい宝石で飾られた金の王冠を王妃の頭に被せて優美に歌う。次はあのサン＝ジャックの塔のあるサン＝ジャック＝ラ＝ブーシュリ教会だ（これは後の時代ではトリニテが取って代わる）。舞台に高く布が張られ、男たちが楽器を優美に奏でる。ここでフロワサールは、サン＝ドニ通りがグラン・ポンまで見事なタペストリーや布で飾られているのを見て、「まるでアレクサンドリアかダマスにいるようだ」<sup>12)</sup>と述べる。右岸最後の要所シャトレには木組みの巨大な城がある。銃眼には兵士が立っており、城上の親裁座に聖アンヌが座る。城の平地には森のような茂みがあり、その茂みには野ウサギがいる。ひな鳥も飛んでいる。その茂みから大きな白い鹿が飛び出て玉座の方に向かう。反対側の茂みからは本物そっくりの獅子と鷹が現れてこの白鹿と玉座に近づく。するとそのとき、茂みから小娘が十二人ほど現れ出て、白鹿と玉座を守らんとばかりに手に剣を持って間に入る。『シャルル六世史』によると、この「白鹿」はフランス王を象徴した人工の鹿らしい。黄金の角と黄金の王冠を首にぶら下げたこの鹿の中には人が入っており、目、角、口と体を動かし、剣を持って玉座に座り、王妃が通ると右前足でその剣を振って見せた<sup>13)</sup>。星を鏤めた布や、緑色や深紅の布で覆われたグラン・ポンを渡ると八月とはいえ既に暗くなっていた。王妃一行がノートルダム大通りまで来ると、ひとりの軽業師が両手に火を付けたろうそくを持ち、ノートルダム大聖堂の塔の上に作られた舞台から出て、サン＝ミッシェル橋の上にある一番背の高い家に繋いだ綱の上を歌いながら歩いて行った。その姿はパリ中のみならずパリから二、三里離れても見えた<sup>14)</sup>。フロワサールを信ずれば、イザボー王妃の入市式には後のパリ入市式で使われる装置が既に登場している。パリ市の紋章による歓迎。泉の百合と水やワイン。布や天幕による高く大きな舞台。工夫された仕掛けと合

唱。勝利者としての王への賞賛。ここに欠けているのは、抽象的なことばとアレゴリー、聖書を主題とした聖史劇、フランス王家の歴史ぐらいである。

シャルル六世は1392年に突如精神錯乱を起こすが、それでも二度パリ入市式を行う。王妃イザボーと密通していたルイ・ドルレアン公がブルゴーニュ公ジャン無怖公によって暗殺されると（1407年）、アルマニャック派とブルゴーニュ派の仁義なき戦いが始まる。その最中の1410年9月16日にシャルル六世はパリに入市する。しかし、この時の具体的な記述は残念ながら残っていない。やがてブルゴーニュ派が勢力を盛り返すと、シャルル六世は、王太子シャルル七世に対抗するため、イングランド王ヘンリー五世と同盟関係（トロワ条約）を結んだブルゴーニュ公フィリップ善良公に支えられ、ヘンリー五世とともに1420年12月1日にパリに入市する。パリの一市民が「一行はサン＝ドニ大通りから入られたが、通りは第二門（絵師たちの門）からノートルダムまでタペストリーで飾られてそれは見事で」、「カランド通りから王宮の壁まで百歩ほども続く舞台ではノートルダム大聖堂内陣に描かれたものと同じ悲しい主の受難劇を人が演じたが、それを見て哀れみの心を持たないものはいなかった」<sup>15)</sup>とその『日記』に書き残す。アンゲラン・ド・モンストルレはその『年代記』に、パリの四つ辻では昼夜分かつずワインが振る舞われ、パリ市内は英仏の和平で歓喜に沸いたと記録している<sup>16)</sup>。ブルゴーニュ公の「ファン」<sup>17)</sup>であったこのパリの一市民やブルゴーニュ公の臣下であったモンストルレにとって二人の王のパリ入市は喜ばしいことであったに違いないが、これらの記述の他に詳しいことは残されていない。

ヘンリー五世もシャルル六世も亡くなり、トロワ条約によってヘンリー五世のひとり息子ヘンリー六世がフランス王として戴冠するため、1431年12月2日に母カトリーヌ・ド・フランス（シャルル六世とイザボー妃の末娘）とパリに入市する。この時ヘンリー六世は10歳である。この入市式を記録したものには、ロンドン市古記録、パリの一市民の『日記』、モンストルレの『年代記』がある<sup>18)</sup>。サン＝ドニ門には大きなパリ市の舟の紋章があって、その舟の中に六人の人物がいる。司教、大学、ブルジョワを象徴する人物と三人のしもべ。彼らは朱色のハートを王に三つ献上する。最初のハートには二羽の鳩、次は小鳥が入っていて王の頭上を飛び立つ。三つ目のハートに入っていたスマイルなどの花は王の一行に撒かれた。ここで使われた舟は「たゆたえども沈まず」で知られる帆掛け舟のパリの紋章を思わせるが、この舟の紋章は既に14世紀終わりにパリ市の官印に使われていたらしい<sup>19)</sup>。ポンソーの泉には三人のセイレーン姿の女がいて、泉の中央には百合の花が咲く。そこからイポクラス、ワイン、水、牛乳が流れ出る。舞台には牧場もあってそこで男たちが戦い合っている。トリニテでは聖史劇が行われた。パリの一市民によれば、「聖母のご懐妊からヨセフがヘロデ王から逃れてマリアをエジプトに連れて行く聖史劇がサン＝ソヴールからダルスタル通りまで続いた」<sup>20)</sup>。絵師たちの門でも聖史



劇が演じられた。この門の名に相応しい聖ドニの三つの物語（聖ドニの祈り、殉教、主による救い）で、劇の説明が詩句で書き出されていた。次のイノサンには森がある。生きた鹿が一頭、王の前に飛び出ると犬がこれを追いかけて、鹿は森に戻る。これをパリの一市民は「この生きた鹿の狩りは見ていてとても面白かった」<sup>21)</sup>と感想を残している。シャトレの舞台はひときわ背が高く、おそらく二層の舞台であった。上の舞台には親裁座があって、王と同じ年頃の少年が座る。その上にはフランスとイングランドの紋章が飾られ、王の右手にはフランスの王侯、聖職者、左手にはイングランドの要人が並ぶ。下の舞台では大きなタペストリーが掛けられて、そこにはパリ市長の姿が描かれてる。市長は手に書き物を持ってそれを王に捧げ、もう一方の手で、パリ市のお歴々が自分の後に続くことを示す<sup>22)</sup>。その後一行はグラン・ポンでセヌを渡り、王宮前が出るが、ここでは聖史劇などが行われた記録はなく、サント・シャペルの聖遺物（聖十字架の一部など）に口づけしてこの日の入市式は終わる（翌日はセヌ川を渡ってトゥールネル宮に向かい、途中サン・ポール宮の前でこの幼い王にとっては祖母にあたるイザボー妃と顔を合わせる場面もあるがこれは割愛しよう）。この入市式の特徴はトリニテと絵師たちの門で聖史劇が行われたことである。既に1420年の入市式でパリの一市民が王宮付近で「悲しい主の受難劇」を見たことを確認したが、この1431年の入市式では、聖母マリアの懐妊、エジプトへの避難、聖ドニの物語が活人画で演じられた。この聖史劇への依存は次のシャルル七世の入市式で著しくなる。

1435年9月のアラスの和約でブルゴーニュ公と和解したシャルル七世は徐々にイングランド軍を駆逐し、1437年11月12日にパリに入市する。この入市式の実際を知ることができる記録は、ジル・ル・ブーヴィエ『シャルル七世年代記』、モンストルレの『年代記』、ジャン・シュニユの『フランス職務集』、アラン・シャルチエの『シャルル七世史』とパリの一市民の『日記』である<sup>23)</sup>。サン＝ドニ門に掲げられた紋章はフランス王家の三つの百合である。これを天使の姿をした三人の子どもが支える。そこには「素晴らしき国王陛下、陛下の都に住まう者たちは榮譽を持って謹んで陛下をお迎えいたします」<sup>24)</sup>と記されている。ポンソーの泉ではやはり百合からイボクラス、ワイン、水が迸り出る。モンストルレとシュニユによれば、泉には二頭のイルカもいて、百合で飾られた天蓋では聖ヨハネが「アニュス・デイ」の祈りを捧げた。トリニテでは聖史劇が行われた。記録にあるものを全て列挙すれば、受胎告知、生誕、ユダの裏切り、受難、復活、聖霊降臨、審判である。これらは活人画で見事な出来であったようだ<sup>25)</sup>。絵師たちの門にはモンストルレとシュニユが触れているが、ここでは聖トマ、聖ドニ、聖モーリス、聖王ルイの肖像、そして真ん中にはパリの守護聖人聖ジュヌヴィエーヴがあった。この年はイノサンではなく、サン＝セピュルクル教会が要所となって、この前で主の復活が演じられ、サン＝カトリーヌ前でも聖霊降臨の聖史劇が行われた<sup>26)</sup>。「親裁座のあるシャトレだからこそ最

後の審判は見事であった<sup>27)</sup>とル・ブーヴィエが書き残したシャトレには、大きな岩があって牧草地のテラスが広がり、牧人たちが雌羊をつれている。天使が主の誕生を告げると、彼らは「天のいと高きところには神に栄光あれ」を歌う。岩にはアーチが掛けられて親裁座がある。そこに「恵みの法」、「成文法」と「自然法」の三人がいる。反対のラ＝ブーシュリー側には天国、煉獄と地獄がいて、中央で大天使聖ミカエルが亡くなったひとの魂の重さを計っている。更に、グラン・ポンでも聖史劇が続き、洗礼者聖ヨハネによって洗礼を受ける主イエス、そして聖マルガリタとドラゴンが登場した。このように要所ではことごとく聖史劇が演じられ、「絵師たちの門からノートルダム大聖堂までは聖史劇が行われていないところは壁掛けが飾られていた<sup>28)</sup>とパリの一市民が書くように、1437年のシャルル七世の入市はまさに聖史劇の入市式と言ってよいだろう。

1453年にフランスがボルドーを奪還して百年戦争が終結し、対立していた父シャルル七世から王位を継いだルイ十一世は1461年8月15日にランスで戴冠し、同月31日にパリに入市する。この時の入市式の様子はリール図書館に残る作者不詳の資料、『フランス儀典』と『ルイ十一世史』から知ることができる<sup>29)</sup>。パリ入市式では王と王妃はサン＝ドニの町からパリに南下してサン＝ドニ門からパリに入るが、その途中にはサン＝ラードル（サン＝ラザール）教会があった。1461年の入市式ではこの教会前で、金色の衣装を身につけた王妃姿の五人の女性がそれぞれ順に、P（「平和」 Paix）、A（「愛」 Amour）、R（「理性」 Rayson）、I（「喜び」 Joys）、S（「安全」 Seureté）、つまり「パリ」P-A-R-I-Sの文字を両腕に掲げてルイ十一世を出迎える<sup>30)</sup>。サン＝ドニ門にはやはりパリの紋章の舟がある。その船首に「正義」、船尾に「公正」を表す人物が乗って、「そこから不意に小天使が二人降りたって王の頭に王冠を載せてまたマストに戻った<sup>31)</sup>。ポンソーの泉では男と女たちが様々な振る舞いを見せる。そこにセイレーン姿の三人の女が現れてモテトや牧歌を歌い、楽器が奏でられる。泉からは牛乳、ワイン、イポクラスなどが湧き出ている。トリニテは無言の受難劇だ。イエスが盗人とともに十字架に架けられている。絵師たちの門について詳しい記述はないが、シャトレではルイ十一世が勝利した「ディエップの戦いが演じられ<sup>32)</sup>、両替橋を一行が通過するときには200羽もの鳥が放たれた。この入市式で興味深いのは1437年のシャルル七世から一転して聖史劇が少なくなり、ルイ十一世が王太子の時にイングランド軍に勝利した「ディエップの戦い」を讃えるような「政治色」が出てきたことであろう。またやがてパリ城壁内で見られる「パリ」の頭文字の歓迎が城壁外のサン＝ラードル教会で使われたことも印象的である。

ルイ十一世の二人目の妻は20歳年下のシャルロット・ド・サヴォワである。彼女は1467年9月1日にパリに入市する。『ルイ十一世史』によれば<sup>33)</sup>、ルイ十一世は既に8月18日にパリに入っていたが、王妃は船でセヌ川からパリに入り、ノートルダム横に上陸して入市する。王妃は

上陸前にまず船上で迎えられた。船はタペストリーや絹の布で覆われ、音楽隊やコーラス、菓子と果物でできた王妃の紋章を付けた鹿が王妃を出迎え、ワインも振る舞われた。上陸地点では「見事な人物が演じられた」<sup>34)</sup>とあるがそれが何であるのか正確には分からない。また、シャルロット・ド・サヴォワとシャルル十一世の娘でシャルル八世の姉にあたるアンヌ・ド・ボージュールも1483年4月9日にパリに入るが、この時の詳しい記録は残っていない。更に、同年6月2日には、ルイ十一世によって王太子（シャルル八世）の後とされ、後にシャルル八世から離婚されるマルグリット・ドートリッシュ（神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世の娘）がパリに入市する。ユゴーの『ノートルダム・ド・パリ』はこの時のことを描いており、王太子シャルルとマルグリット姫との婚礼取り決めの役目をおびたフランドル使節一行がパリに入城した二日後の1482年1月6日、シャトレで行われる聖史劇をパリの人々が荒々しく待つところから物語は始まった<sup>35)</sup>。このマルグリットの入市式については詳しいことは分からない。『フランス儀典』に引用されているパリ高等法院の記録によると「各所で教訓劇がいくつか演じられた」<sup>36)</sup>らしい。また、『ルイ十一世史』はサン＝ドニ門に三つの舞台が用意されたとしている。第一は大きな舞台で君主としての王（ルイ十一世）、第二は二人の子どもによる王太子（シャルル八世）と「フランドルのお嬢さま」（マルグリット）、第三は「ボージュール殿」（ブルボン公ピエール二世）と「奥さま」（アンヌ・ド・ボージュール）が演じられた。これに加えて「耕作」、「聖職」、「商売」、「貴族」を表す四人の人物がいて、それぞれが歌を朗唱し、街路にはタペストリーと布が掛けられたらしい<sup>37)</sup>。

マルグリットの入市式の三ヶ月後にルイ十一世が亡くなると王位を継いだシャルル八世が翌年1484年7月5日にパリに入る。この入市式については作者不詳の韻文が残されている<sup>38)</sup>。サン＝ドニ門には幕で覆われたとても大きな舞台がある。光り輝く太陽の下で一輪の百合が咲き、花の中に王を思わせる男の子がいる（この時シャルル八世は14歳になったばかりである）。百合の葉にはそれぞれ、「正義」、「慈悲」、「愛と知恵」、「理性と平和」の美德が示される。これらの美德によって王の統治は成し遂げられ、平和が維持されると謳われる。ボンソーの泉も百合である。百合の葉から清らかな水が流れ出て、百合の上には美しい少女がいる。その少女の乳房からはイボクラスとクレレが迸り出て、周りで牧人たちが歌う。トリニテではやはり受難劇である。イエス＝キリストの磔刑と、ユダの罪と彼の首つりに続く地獄落ちが演じられた。次の絵師たちの門も聖史劇で、題目は「ガリッフル・ド・ブローダス」<sup>39)</sup>。イノサンも聖史劇。多くの無実のひとを殺したヘロデ王のもとにガブリエルが神から遣わされる。シャトレでは二つの舞台があった。大きな舞台に王が座り、王は巧みな技で人々に「平和」の美德を授ける。「力」が「高貴」なものに宿り、「親愛」と「強い愛」が教会にもたらされる。もう一つの舞台では聖史劇が演じられた。百合のような形をした大きな木があってその上に少年がいる。王で

ある。足下には人々が病気に罹って横たわっている。横たわった人々が少年を見上げると、彼らは息を吹き返したかのように体を起こして立ち上がる。これは王による治癒を表したものであろう。両替橋の上ではダビデが巨人ゴリアテを退治する。ダビデは王を象徴し、劇は王を讃えることばで終わる。最後の王宮の門の聖史劇は大きな舞台上、玉座に王がひとり座り、そこに聖霊が降りてくる。この時の入市式は、シャルル八世が14歳ということもあって、視覚的に印象を与えるスペクタクルな舞台と聖史劇が多い。

シャルル八世はマルグリット・ドートリッシュと離婚してアンヌ・ド・ブルターニュと再婚する。1491年12月にランジェ城で婚姻の儀を執り行ったアンヌ王妃は翌年2月9日にパリに入市する。アンヌ・ド・ブルターニュは流産で中止された1502年1月を除けば二度パリに入市するが、最初はこの1492年のシャルル八世妃、次は1504年のルイ十二世妃としてであった。1492年の入市式については版本『1492年のサン＝ドニにおけるアンヌ・ド・ブルターニュの成聖式』が残されている<sup>40)</sup>。サン＝ドニ門は大きな天蓋の下に、「フランス」と「ブルターニュ」、その間に「争い」がある。彼らの周りには「教会」、「貴族」、「商人」と「耕作」がいて、誰が「争い」を収めるか議論している。そこに突如「平和」がやって来て「争い」を退治する。そして、「平和」は「フランスは再び苦しむことはない。なぜならオコジョは百合と共寝するからである」<sup>41)</sup>と語る。天蓋の上を見るとフランス王家の百合とブルターニュ公国のオコジョが描かれた見事な紋章がある。また門の上には逞しい黒髭のヘラクレスがいて、右手には七首の蛇ケルベロスの首を打ち落とす刀を持ち、左手には打ち落とした首を持って止めを刺そうとしている。ポンソーの泉では、舞台の上に五つの白い花をつけた百合があって、清らかな水が流れている。百合の前には五本の柱が立てられ、柱には順にP、A、R、I、Sと文字が付けられている。それぞれの柱の上には、Pは「パリ」Paris<sup>42)</sup>、Aには「愛」amour、Rには「理性」raison、Iには「正義」justice、Sには「知恵」scienceの人物がいる。女王が前を通るときに、「パリ」が王妃のパリ入市を祝福することばを述べ、横の小さな舞台では羊飼いたちが「パリ」が語ることばに続いて旋律豊かに歌う。トリニテは二層の舞台から成る。下の舞台はタボル山でのキリストの変貌、上の舞台はイエスの磔刑の聖史劇であった。絵師たちの門の舞台にはソロモン王が従者を横に従えている。王から嫁探しの命を受けた使者が美しい女性たちを連れて戻り、王はその中から最も気に入った女性を選んで后にする。これまでと異なりこの1492年の入市式ではイノサンではなくサン＝ジャック病院前に舞台があったが、ここではシャルルマーニュ姿の王が百合の模様の付いた馬着の馬に乗っている。右手に剣、左手には十字架のついた林檎、頭上には王冠の上に金の十字架。王は馬に乗ったまま進み出てアンヌ王妃に歓迎の挨拶をする。シャトレでは門に舞台があって、王と王妃の姿をした人物と舞台の両端にはそれぞれ三人の予言者がいる。王と王妃の両側には十二名の従者が綺麗に並ぶ。王と王妃の間の上には「正



義」をあらわす人物がいて、舞台の端には七連の詩句が書き表されている。シャトレ門の反対側のラ＝ブーシュリー側にも舞台があって、そこではソロモンの審判が行われる。最後は王宮の門である。舞台の上部には百合とオコジョが描かれた大きな紋章がある。その紋章は一方は風の二本足、他方は牛の二本足で引っ張られて空高く舞っている。舞台下部には王妃の姿をした女性がいて、愛の証として授けられた服装品を持つ<sup>43)</sup>。この入市式では、聖史劇に代わってアレゴリーが多くなり、ブルターニュ公国のフランス統合という「政治色」が強く現れている。

シャルル八世は事故で1498年4月7日に亡くなる。アンヌ妃との間に生まれた子はいずれも夭折しているのでシャルル五世の曾孫のオルレアン公ルイがルイ十二世として王位を継いだ。ルイ十二世は同年5月にランスで戴冠し、7月2日にパリに入市する。この入市式については版本『敬虔なるフランス王ルイ十二世の良きパリへの入市』が残されている<sup>44)</sup>。サン＝ドニ門の舞台は百合で始まる。百合の足下には黄金の百合を鏤めた王服を着た人物がいる。百合は七つの小花を付けており、最初の花は「高貴」で、その横に「情」がいるのは、高貴なひとは情がなければならぬからだ。次は「富」で、反対側に「寛大」がいる。富のあるものは寛大であるべきだから。三番目には「権力」と「誠実」がいるが、権力のあるものは誠実でなければならない。そして真ん中の花は「シャルル五世」姿の人物の頭からひとときわ高く花が伸びて、上にある王冠にたどり着く。舞台下にいた人物がこの舞台を口上で説明する。このアレゴリックで複雑な舞台は「パリ市総奉行と助役の殿方によって組み立てられた」<sup>45)</sup>。ポンソーの泉にも百合がある。四つの花が咲いてそこからなみなみと水があふれ出ている。トリニテは「受難劇上演団の頭領と団員」<sup>46)</sup>が舞台を作った。アブラハムが神への犠牲としてイサクを捧げる場面。その横はイエスの磔刑で、ユダ、アンヌ、カイアファとピラトが眺める。磔にされたイエスの体から血も流れる。絵師たちの門の舞台は大人数だ。「良き時代」、「平和」と吟遊詩人が旋律豊かに歌う。その周りで「フランス人」、「祝賀」と「よき牧人」が口上で説明する。二十五ピエ（約八メートル）の高さに風が揚がっており、それを「善意」の名を付けた少女が引いている。風には王冠と太陽、黄金の百合などが飾られている。少女は歓迎のことば（五行詩）とともにこの風を王に贈る。シャトレにも黄色と紫色の天蓋の大きな舞台がある。真ん中に百合の花があって九人の王の肖像がある。最上階にルイ十二世、順にシャルル六世、ルイ・ドルレアン、シャルル五世、ジャン二世、フィリップ六世、ヴァロワ伯シャルル、フィリップ三世、そして最後は聖王ルイ。それぞれが笏と紋章を持つ。舞台の最上部の親裁座には王がいて、右手に「よき忠告」、左手に「正義」を持ち、足下に「不正」を踏みつけている。また「権力」が「分断」の胸に長刀を突きつけている。その周りには、「教会」、「民」、「領主」、「権威」、「結合」と「平和」の六人もいる。王宮前には「会計検査院の殿方が作らせた」<sup>47)</sup>舞台がある。二つの風で大きなフランスの紋章を支えている。紋章には大きな豚と二頭の蛇がそれぞれ百合の中で

絡み合っけ口から赤い裸の子どもを吐き出す姿（ヴィスコンティ家の紋章）と豚の横にミラノ公国の紋章がある。これはヴィスコンティ家の所領であるミラノ公国をイタリア戦争によって奪還したいルイ十二世の思いを現しているのだろう。この1498年のルイ十二世の入市式はこれまでと比べると、聖書に基づく聖史劇はトリニテのみで、アレゴリックな舞台が多く<sup>48)</sup>、百合を多用して王を讃える。また、サン＝ドニ門はパリ市総奉行と助役、トリニテは受難劇上演団の頭領と団員、王宮前は会計検査院と、それぞれ舞台を作り上げた主体が明示されたことは入市式の要所の舞台の独立性を示唆する。

以上、15世紀までのパリ入市式を見てきた。入市式は時間とともに即物的な具体から徐々に抽象化に向かっているように思われる。言い換えれば単純から複雑へである。抽象化を強めているのがアレゴリーとことばであるが、これらが登場して舞台が複雑になると説明の口上が必要となるのは当然であろう。聖史劇は入市式によって多く採用される場合もあるが、時代が下るに従ってそれはアレゴリックな舞台に取って代わられる。しかし、トリニテでは一貫して聖史劇が上演された。これは1498年の入市式で「受難劇上演団の頭領と団員」によると示されたようにここでは伝統的に聖史劇が上演されたと考えられる。また、ポンソーの泉に典型的なように、百合も一貫して全ての入市式に登場している。フランス王家を象徴する花であるから無理もないが、この百合の反復と強調で王と王妃を賞賛し続ける。他方、パリ市の舟の紋章は1431年のヘンリー六世の入市式から見られるようになり、入市式の入り口に相応しいサン＝ドニ門に用意された。最後に、入市する王と王妃の同時代の出来事を背景とした舞台が、時代が下るにつれて増えているが、これは入市式が徐々に政治的色合いを帯びてきたと言えるだろう。

それではここからは、グランゴールが関わったとされる16世紀の三つの入市式、すなわち1504年11月20日アンヌ・ド・ブルターニュ王妃、1514年11月6日マリー・ダングルテール王妃、1517年5月12日クロード王妃のパリ入市式を見よう<sup>49)</sup>。要所であるサン＝ドニ門、ポンソーの泉、トリニテ、絵師たちの門、聖イノサン、シャトレ前、王宮前で、これまでのパリ入市式の「伝統」と比較検討し、グランゴールのオリジナリティとシャトレ以外への関与の可能性を考える<sup>50)</sup>。

まず、サン＝ドニ門。1504年のアンヌ・ド・ブルターニュ王妃の入市式は、王妃の「秘書」であったアンドレ・ド・ラ・ヴィーニュによる「記録」が写本で残されているが、サン＝ドニ門の具体を教える記述はない。しかし、『パリ市当局記録』



細密画1「サン＝ドニ門」fol. 30 v°

によると、パリの「心」を表す巨大なハートの中に「忠実」と「榮譽」を表す人物がいて、「心」は「正義」、「聖職者」と「市民」によって支えられた。そして、これら五つのことばが入った歓迎の詩句が読まれる<sup>51)</sup>。1514年のサン＝ドニ門は三本マストの帆船だ。船上には「パリ」が舵を握り、パリの豊かさを示す葡萄の房枝を持つ「バックラス」と小麦を持つ「セレス」がいる。四方から風を受けるが、メインマストでは「名誉」がフランスの紋章を持ち、武装する兵士によってこの「名誉」は守られる。しかし、1517年のクロード王妃の入市式はこれまでと全く異なる。舞台には、「慎重」、「正義」、「寛容」と「禁欲」の四つの美德があり、これらはフランス王家の女性たち（アングレームの奥方、ブルボン公妃、アランソン公妃、ヴァンドーム公妃）の美德を表す（細密画1「サン＝ドニ門」<sup>52)</sup>）。舞台の中央には王妃姿の女性がいて、その右手に、アブラハムの妻サラ、ヤコブの妻ラケル、イサクの妻リベカ、左手にはペルシャ王アハシュエロスの王妃エステル、イスラエルのラピトドの妻デボラ、ヤコブの妻レアがいる。これらの旧約聖書中の女性は上の四つの美德を体現した女性である。そのことが舞台ではラテン語文で示されたようであるが、王妃一行はともかく、入市式を見るパリ市民にはよく分からなかったのではあるまいか<sup>53)</sup>。この大人数の舞台の上には「雲」があつてそこから林檎が落ちてくる。地上1ピエ（30センチ）辺りのところまで落ちるとそこで林檎は六つに割れて、中から林檎が現れる。それがまた割れ、林檎が次から次へと出ては割れて四つ目が割れると、そこから王冠をくわえた鳩が飛び出て、舞台中央にいる王妃姿の女性の頭にその王冠を載せて林檎に戻り、林檎は先ほどとは逆に次々に閉じて最初の林檎に収まる<sup>54)</sup>。この大がかりな舞台にはパリ市の紋章の舟もなければ歓迎のことばもない。1517年の入市式は林檎と鳩の仕掛けを使った王妃の美德賞賛の直球勝負で始まるのである<sup>55)</sup>。

ボンソーの泉は15世紀までの入市式では泉と百合が定番であったが、1504年は百合に代わって高さ2ピエほどの裸の子ども像で、そこから水が流れ出た。1514年にも泉があつて一輪の百合と深紅の薔薇に降り注ぎ、その下には百合と薔薇を摘む術を知る三人の女神「繁栄」、「歓喜」、「美」がいた。百合（フランス）と薔薇（イングランド）の組み合わせはイングランドから来た王妃マリー・ダンゲルテールを意識したものであろう。1517年の入市式でも泉に百合が咲いている。王妃の姿をした女性が黄金の林檎を手を持ち、その傍らにはサラマンドル（フランス王）とオコジョ（フランス王妃）がいる（細密画2「ボンソーの泉」）。林檎から清らかな水が流れ出て、王女風の少女も二人いるが、これはフランソワ一世とクロード妃との間に



細密画2「ボンソー泉」fol. 32 r°

できた二人の娘ルイーゼとシャルロットを表して、次は男の子が欲しいと言っているようにも読める。そもそもポンソーは泉なので、これを利用して入市式の要所とするならば泉は使わざるを得ず、三つの入市式ともに伝統に従ったといえよう。ただ1517年の林檎は鳩が出たサン＝ドニ門の林檎との連続性を思わせる。

1504年のトリニテでは、主の変容と受難の劇が行われたが、これは1498年のルイ十二世の入市式と同じく「受難劇上演団の師匠ら」<sup>56)</sup>によって上げられた。1514年はシバの女王とソロモン王の列王記を「主の復活・贖い主イエスキリスト・受難劇上演団が作った」<sup>57)</sup>。ソロモン王の聖史劇は1492年のアンヌ・



細密画3「トリニテ」fol. 33 r°

ド・ブルターニュの入市式の絵師たちの門とシャトレでも使われたが、前者は后選びで後者はソロモンの審判であった。

このようにこれまでのトリニテでは聖史劇が定番であった。しかし、1517年の入市式は異なる。受難劇上演団が関与したことが記録されていないどころか、そもそも舞台が聖史劇ではない。下の舞台では百合が咲き乱れる「休息の土地」に「フランスの民衆」がいる（細密画3「トリニテ」）。右手には「融和」、左手に「結合」。上の舞台には六人の人物がいて、王は「民衆の支え」、王妃は「鷹揚」となって、王の横には「良き助言」と「良き意志」、王妃の横には「知識」と「慎重」がいる<sup>58)</sup>。これら六人と「融和」と「結合」のおかげで「フランスの民衆」は「休息の土地」で安心できることを表している。この「融和」と「結合」は、1516年8月13日にフランソワ一世とカール大帝（スペイン王カール五世）との間で結ばれたノワイヤン条約（フランスはナポリを、スペインはブルゴーニュを放棄）、1517年3月11日にフランソワ一世、神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世とカール大帝（カール五世）との間に結ばれたカンブレ条約（相互不可侵条約）、あるいは1516年8月18日にフランソワ一世が教皇レオ十世と結んだボローニャ・コンコルダ条約（フランス国王が司教の指名権を持つ）というフランソワ一世が成し遂げた一連の条約に結び付けられている<sup>59)</sup>。しかしそれにしてもこれまでのトリニテとの違いは一体何であろうか。この「融和」と「結合」の舞台は、聖史劇ではなく、まさに同時代劇そのものである。王の政治を支持し、賞賛する作り手の意図がよく現れている。

1504年の絵師たちの門は、五人のアンヌによる王妃アンヌ礼賛の舞台だ。聖書の中からアンヌの名の女性五人（サミュエルの母アンヌ、トビトの妻アンヌ、サラの母アンヌ、予言者アンヌとマリアの母アンヌ）を礼賛して、同じ名のアンヌ王妃を歓迎する。1514年の舞台は三層になっており、上部の雲中には「父なる神」が、右手にハート、左手には百合と薔薇を絡ませて



持ち、その下に豪華な衣装に身を包んだ王と王妃がいる。下部には、「フランス」と「イングランド」が座し、その間に「平和」、「友愛」、「同盟」の三人の女性が立ってフランスとイングランド両国の平和、友愛、同盟が強調された。1517年の舞台は二層である（細密画4「絵師たちの門」）。下の舞台には、教皇、皇帝、王、枢機卿が二人、司教が二人、王子が三人の十人がある。彼らは金銀のできた碗を手に持ち、子どもが持った小瓶から水を注いでもらおう<sup>60</sup>。そこには「タンタロスの小瓶から飲むものはみな友となって危機と苦難に立ち向かうであろう テオプラストス 八章」<sup>61</sup>の一文がある。この後はテオプラストスと聖ヒエロニムスを援用したグランゴールの博学な説明が続くが、要するにこれは、舞台の教皇、皇帝、王らがこの小瓶から注がれた水を一緒に飲むとたちまち親しくなり平和が訪れるということである。これは「融和」と「結合」の舞台のトリニテの延長線上にあって、「融和」と「結合」の主体が教皇、皇帝、王であることを具体的に示している。他方、上の舞台では中央に大きな百合の花があって、中で「信心」がイエス・キリストと教皇と王の紋章を描いた旗を持ち、左右に四人の女神「アマドリアド」、「オレアド」、「ナイアース」、「ナベ」が花を撒いて旋律豊かに歌う。舞台上には黄金の太陽があって、その中に両手を挙げた白服の女性「慈悲」がいる。「慈悲」の光によって百合の「信心」は成長するのである。この1517年の絵師たちの門、ことに下の舞台はトリニテに続いて同時代のフランスが置かれた政治状況に応えたものである。ここでもフランスの「融和」と「結合」が支持され、王妃の入市式を通じてフランス王を礼賛しているといえよう。



細密画4「絵師たちの門」fol. 34 v°

1504年のイノサンはタペストリーがたっぷりと飾られた舞台で「東方の三博士」の聖史劇が行われた。『パリ市当局記録』によるとこれらの舞台は「古着業者が上げた」<sup>62</sup>らしい。1514年は二層の舞台で、上は百合が咲く「フランスの楽園」である。百合は四つの美德、「慈悲」、「真理」、「力」、「仁徳」で囲まれている。下部の大きな舞台では薔薇の茂みがある。深紅の薔薇の蔓は上方に伸び、途中まで下降してきた「フランスの楽園」の百合とともに最上部の玉座まで登り詰めて薔薇の蕾が花開くと、中から小娘が現れてこの活人画を説明する。手前では「平



細密画5「イノサン」fol. 36 r°

和」が「不和」を足で踏みつけている。この舞台では、王と王妃の婚姻によってフランスとイングランドの関係が強固になり、フランス王国に幸福と平和をもたらすことが示された。では1517年はどうだろうか。舞台中央に大きなハートがあって、その中に「神の愛」、「自然の愛」、「夫婦愛」の三人の女性がいる（細密画5「イノサン」）。第一の「神の愛」の下ではダビデ王の前にアビガエルが跪いている。ダビデ王に夫ナバルを討たないように願い出たアビガエルがやがてダビデの妻となったのは神の力によるからである。第二の「夫婦愛」の下にはユリアとポルキアがいる。ユリアは父カエサルと夫ポンペイウスの間の和合を願ったから世界が描かれた「平和」を持っている。ポルキアは夫ブルトゥスの死を知って自ら燃え盛る炭を口に入れたから燃え盛る炭を持っている。第三の「自然の愛」の下ではコリオラヌスとその母ウエトリアがいる。ベートーヴェンの序曲『コリオラン』で知られるコリオラヌスの物語で、ローマへの復讐心に駆られたコリオラヌスを母ウエトリアが押しとどめた母性の力が賞賛される<sup>63</sup>。この1517年の舞台の三つの愛はグランゴールが写本五葉を費やして説明しているが、複雑な位置関係もさることながら次々に登場する古代ローマの人物を理解できたものはどれほどいたのだろうか。博識が先走った舞台と言ってよいかもしれない。

右岸最後の舞台はシャトレである。1504年は、演目は分からないが巨大で荘厳な聖史劇が演じられた。男女の羊飼いがたくさんいて、フランスの庭で平和と結合が旋律豊かに歌い上げられたとあるから1514年のイノサンの舞台とよく似ている。1514年のシャトレは写本で六葉に及びこの入市式の中で最も詳細である。「正義」と「真理」が出会う裁判所シャトレに相応しい活人画である。「正義」は王と結びつけられ、これをフランスの聖職者六人と王六人が支える。舞台下では、太陽である「ポイボス」、月の「ディアナ」、慎重の「ミネルヴァ」、王妃マリーの「海の星」、「良き一致」がいる。月が太陽から光を授かるように、フランスは王から光をいただくことが示される。海の星である王妃マリーは慎重の女神ミネルヴァに



細密画6「シャトレ」fol. 37 r

よって既に十分に輝いているが、太陽と月によって更に輝きを増すことができる。これは何よりも有徳の王のおかげであると締めくくるが、これはアレゴリーを巧みに混ぜ込んだ複雑な構成である。その理解を助けるため、舞台横の四枚の板に大きな文字でこの活人画の内容がバラードで書き記され、口上で紹介された。では1517年の舞台はどうだったのだろうか。下の舞台では「厳格」、「寛大」、「法」、「慣習」がいる（細密画6「シャトレ」）。「法」は遵守されなければならない、「慣習」は生活の良き術を教えてくれる。「厳格」

は人々が悪を犯さぬよう正義の厳しさを示し、裁き手には時に「寛大」がなければならぬとする。上の舞台には「母系の系図」<sup>64)</sup>があったようだが、グランゴールはこの系図に触れていない。しかし、作者不詳の二つの写本によると、この系図には「エッサイの木」のように枝がたくさんあり、一番上には王冠をかぶった王と王妃、他の枝には王子や王女、クロード王妃（母はアンヌ・ド・ブルターニュ）の家系でもあるブルターニュ公国の王たちがいる<sup>65)</sup>。これは一体どうしたことだろうか。1517年のクロード妃の入市式ではこれまでと同様にこのシャトレの舞台でグランゴールは100パリリーブルの報酬を得ているはずであるが、その肝心の舞台説明が1514年と比べると極端に短い。これまでの舞台で披露された博識もここにはない。

最後の要所は王宮前である。1504年は趣深い見事な聖史劇であったようだが題目は分からない。1514年は「受胎告知」で、世継ぎを望むルイ十二世を意識した舞台であった。下の舞台は百合が咲き乱れる「フランスの庭」で、王と王妃が座し、右に剣を持つ「正義」、左に平和を手にした「真実」が立つ。聖母マリアが人類に平和をもたらすように王妃マリーはフランスを平和に導くと羊飼いたちがロンドーを歌う。1517年の入市式はノートルダム大聖堂での宣誓を終えてから王宮前に来たようである<sup>66)</sup>。舞台の右ではフランスの紋章、左ではブルターニュの紋章をそれぞれ二匹のサラマンドル（フランソワ一世のエンブレム）が支える（細密画7「王宮前」）。舞台上部では聖王ルイとその母ブランシュ・ド・カステュー、そして「正義」の姿がある。聖王ルイの頭上には「わたしたち



細密画7「王宮前」 fol. 41 r°

の正義の床は緑である 雅歌1章」<sup>67)</sup>の文字がある。ここからは新機軸だ。聖王ルイとその母ブランシュ、そして「正義」、最後にはサラマンドルも加わったラテン語による会話が交わされるのである。ラテン語の会話文は舞台に掲げられたようであるが、グランゴールはフランス語訳も入れて理解を助けてくれる<sup>68)</sup>。母ブランシュが聖王に言う：知恵を愛せ。統治には知恵が必要である『知恵の書』6章、知恵がなければ国を平和にすることは難しい『マカベア書』2巻4章。王が母に答える：われ何よりも知恵を愛す。いかなる宝よりも。「正義」が王に言う：汝が正義を行うため王の位に上らせたのである。王は「正義」に答える：王が貧しい者を等しく裁くならば王の位はいつまでも続き、王が偽りのことばを聞くなら仕える者はみな悪くなる『箴言』29章。「貧しい者」が王に言う：正義は公正であるべきである。王は答える：あなた方を動揺させるものがだれであろうとそのものは裁きを受けるであろう『ガラテヤ人への手紙』5章。「物乞い」が王に言う：わたしを憐れんで貧困から解放してほしい。王は答える：わた

しはあなたの苦難や貧困を知っている『黙示録』3章<sup>69)</sup>。「罪を犯した者」が王に許しを求めて言う：罪人であるわたしを憐れんで欲しい。王は答える：わたしはおまえを罰しない。もう罪を犯さぬように『ヨハネの福音書』8章。第一のサラマンドルが言う：賢明な女性は豊かになって家を建てる『箴言』14章。第二のサラマンドルが言う：御意にかなう女を娶って王妃にせよ『エステル記』2章。王妃の紋章を支える第一のサラマンドルが言う：わたしはこれを愛す。若き頃から探し求めて妻とした。その美しさに惹かれた『知恵の書』8章。残りのサラマンドルが言う：主よ、我ら二人を祝福し御旨の盾で我らを覆い給え（『詩編』5の13）。これで王宮前の舞台は閉じるが、この会話はよくできている。これまでの入市式でもフランス王家の最良の王とされた聖王ルイとその母ブランシュをフランソワ一世と母ルイズに見立て<sup>70)</sup>、王が知恵、正義と憐憫を身につけて一人前になると、母離れをして賢明な女性を王妃として娶る。それがクロード妃である。宮廷前の舞台としてはこれまでにない形ではあるが、一連の入市式の終わりの舞台として見事である。

以上、サン＝ドニ門、ボンソーの泉、トリニテ、絵師たちの門、聖イノサン、シャトレ、王宮前の七つの要所について、15世紀までの入市式の「伝統」とグランゴールの16世紀の三つの入市式を比較検討した。16世紀以前のパリ入市式の「伝統」は1504年11月20日アンヌ・ド・ブルターニュ王妃においてはおそらくそのまま引き継がれ、1514年11月6日マリー・ダングルテール王妃では引き継がれながらも要所の横の繋がりが見られるようになり<sup>71)</sup>、1517年5月12日クロード王妃の入市式ではその横の繋がりが決定的となって、「伝統」の縦の繋がりを否定したように思われる。パリ市の紋章の舟ではなく林檎と鳩の仕掛けのサン＝ドニ門、百合の泉であったボンソーに登場する林檎<sup>72)</sup>、トリニテの同時代劇とトリニテから絵師たちの門に続く「融和」と「結合」、更に、トリニテ、絵師たちの門、イノサンに続くアレゴリーの連続、また、そこに鏤められた旧約聖書と古代ローマの博識、そして、王宮前での会話の展開と幕引き。これまでのパリ入市式と比較すると、1517年のクロード王妃の入市式は太い線で横に繋がっていることが分かる。「シャトレの舞台製作で100リーブル」という限定がパリ市出納記録に残ってはいるが、それでもこの太い線は確かにある。それはピエール・グランゴールの存在と言えるであろう。グランゴールは1504年、1514年、そして1517年と、パリ入市式の伝統から徐々に離れ、詩人ピエール・グランゴールとして王妃の入市式の舞台を作り上げたに違いない<sup>73)</sup>。



注

- 1) *Œuvres de Froissart, Chroniques*, t. 14, par K. de Lettenhove, Verlag, 1967 (1867-1877), p.12.
- 2) しかし、2019年4月15日の火災のために現在は上ることができない。写真は2013年9月に撮影したものである。
- 3) «le riche clocher carré de Saint-Jacques-de-la-Boucherie» (V. Hugo, *Notre-Dame de Paris*, Le livre de poche, 1988, p.219)
- 4) 厳密に言えば、サン＝ジャックの塔は1509年から1523年に建てられ、サン＝ジャック＝ラ＝ブーシュリ教会は塔を残して1797年に破壊されてしまったから、ユゴーが実際に見たのはサン＝ジャックの塔のみで、15世紀のユゴーが見ようとしたのは塔のないサン＝ジャック＝ラ＝ブーシュリ教会ということになる。
- 5) ピエール・グランゴールについては拙論「パリ初期活字本のパラテキストにおける著者の表象—「フランソワ・ヴィヨン師」と「阿呆の母」グランゴール」、『広島大学大学院総合科学研究科紀要 III 文明科学研究』第7号、2012年、pp.15-28を参照。
- 6) H. Sauval, *Histoire et recherches des antiquités de la ville de Paris*, t.III, Ch. Moette et J. Chardon, 1724, p.534; p.533; p.594. アンヌ・ド・ブルターニュ王妃の流産で中止となった1502年の入市式の「準備」でもこの二人に50パリリーブルが支払われた (*Ibid.*, p.534)。
- 7) *Ibid.*, p.537; pp.593-594; pp.596-597.
- 8) «j'ay eu charge par messeigneurs les tresoriers de France et de mesditz seigneurs de la ville inventer et composer les misteres faitctz a vostre dicte entree» (*Treshaulte magnanime vertueuse illustrissime dame et princesse Marie dangleterre royne de france*, British Library, Ms. Cottonian Vespasian B.II., fol. 3 r°)
- 9) 「三人の人物がいるブロン地図」Plan de Braun, plan aux trois personnages は G. Braun らが1572年にケルンで出版した『世界の都市劇場』*Civitates Orbis Terrarum* に入れた地図である。この地図はフィリップ・オーギュストの城壁が残る1530年頃のパリを描いているので「絵師たちの門」の位置がよく分かる（拙論「パリ古地図のサン・ドニ通り—1517年パリ入市式とパリ案内の書『古代の華』—」、『欧米文化研究』第26号、2019年、p.65）。
- 10) B. Guenée et F. Lehoux, *Les entrées royales françaises de 1328 à 1515*, CNRS, 1968, p.47; *Ibid.*, pp.48-55; T. Godefroy, *Le Cérémonial François*, t. I, S. et G. Cramoisy, 1649, p.635; B. Guenée et F. Lehoux, *op.cit.*, pp.55-56; *Ibid.* pp.56-58. ただし、1380年のシャルル六世の入市式については、『サン＝ドニ教会年代記』*Chronique du Religieux de Saint-Denis* によると「多くの場所で人工の泉が作られ、そこから牛乳、ワイン、澄み切った水がみなみと流れ出た」«Erant et in multis locis artificiales piscine, lacte, aquis vinoque limpidioribus redundantes»、そして J. Jouvenel des Ursins が『シャルル六世史』*Histoire de Charles VI* の中で「イストワール」«histoires» があったことを記している (B. Guenée et F. Lehoux, *op.cit.*, p.57; J. Jouvenel des Ursins, *Histoire de Charles VI*, A. Pacard, 1614, p.8)。また、1364年のシャルル五世入市式では、ロベール・ド・フィエンヌ大元帥に先導されてサン＝ドニ門から堂々と入市するシャルル五世の姿を15世紀の画家 Jean Fouquet が『フランス大年代記』*Grandes Chroniques de France* の中に描いている (BnF,

- français 6465, fol. 417)。なお、王のパリ入市式の全体を知り得る最初の記録は1350年のジャン二世善良王の『フランス大年代記』（所収の『ジャン二世とシャルル五世の年代記』）であるとされている（L. M. Bryant, *The King and the City in the parisian royal entry ceremony*, Droz, 1986, p.76）。
- 11) *Euvres de Froissart*, p.8. 「ブレスラウのフロワサル」の『年代記』には御輿に乗ってサン＝ドニ門からパリに入るイザボー王妃の姿がフラッシュバック的に細密画に描かれている。そのサン＝ドニ門の入り口上には「聖母子と天使」の壁掛けが見える (Staatsbibliothek zu Berlin - Handschriftenabteilung, Dep. Breslau I, Bd. 4, fol. 1 r°)。
  - 12) «on fuist en Alixandrie ou en Damas» (*Euvres de Froissart*, p.10)
  - 13) J. Jouvenel des Ursins, *op.cit.*, p.89.
  - 14) *Euvres de Froissart*, p.12.
  - 15) «toute la grande rue Saint-Denis par où ils entrèrent, depuis la seconde porte jusqu'à Notre-Dame de Paris, étaient encourtinée et les rues et parées moult noblement», «un piteux mystère de la passion de Notre Seigneur au vif, selon qu'elle est figurée autour du chœur de Notre-Dame de Paris, et duraient les échafauds environ cent pas de long, venant de la rue de la Kalende jusqu'aux murs du Palais, et n'était homme qui vît le mystère à qui le cœur n'apitât.» (*Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*, édité par C. Beaune, Le Livre de Poche, 1990, pp.162-163)
  - 16) *La Chronique d'Enguerran de Monstrelet*, t.4, par L. Douët-D'Arcq, J. Renouard, 1860, p.17.
  - 17) 渡辺一夫『渡辺一夫著作集9 乱世・泰平の日記』筑摩書房、1977、p.45.
  - 18) Récit anonyme, Archives de la Mairie de Londres, registre K, fol. 101 v°-103 (B. Guinée et F. Lehoux, *op.cit.*, pp.62-70より); *Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*, pp.303-308; *La Chronique d'Enguerran de Monstrelet*, t.5, 1861, pp.1-6.
  - 19) この帆掛け舟の紋章「たゆたえども沈まず」«Fluctuat nec mergitur» はパリ市商人奉行エチエンヌ・マルセルが1358年4月18日の証書に使ったことが確認されているが由来はよく分かっていない (A. de Coëtlogon, *Les armoiries de la ville de Paris*, t.1, Imprimerie nationale, 1874, pp.55-56)。
  - 20) «le mystère depuis la Conception Notre-Dame jusqu'à ce que Joseph l'amena en Egypte pour le roi Hérode (...) et duraient les échafauds depuis un peu par-delà Saint-Sauveur jusqu'au bout de la rue Darnetal» (*Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*, p.305) ロンドン市古記録ではこの聖史劇はいわゆる生身のひとが動きなしに演じた活人画であったとしている «figurés de personnages vifs, les ystoires desmonstrans la Nativité de Notre Jhesu Crist; lesqueles personnes aucunement ne se mouvoient» (Récit anonyme, fol. 101 v°-103 (B. Guinée et F. Lehoux, *op.cit.*, p.67より))。またモンストルレは聖史劇が行われたのはボンソーの泉から第二の門（絵師たちの門）までで、聖母の生誕、婚姻、東方の三博士の礼拝が無言で演じられたとする «depuis le Poncelet en titant vers la seconde porte de la rue S. Denys, auoit personnages sans parler, de la Natiuité Nostre-Dame, de son Mariage, & de l'Adoration des trois Roys» (*La Chronique d'Enguerran de Monstrelet*, t.5, pp.3-4)。なお「ダルスタル通り」«rue Darnetal» は「ダルネタ」Darnestat、「ガルスタル」Garnetalなどを経て、現在の「グルスタ通り」rue

Grenetat となる。

- 21) «une chasse d'un cerf tout vif, qui fut moult plaisante à voir.» (*Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*, p.306)
- 22) 舞台が二層であることと下層の舞台の内容についてはロンドン市古記録にのみ記されている (Récit anonyme, fol.101v-103 (B. Guinée et F. Lehoux, *op.cit.*, pp.68-69より) )。
- 23) G. Le Bouvier, *L'histoire mémorable des grands troubles de ce royaume sous le roy Charles VII*, P. Roussin, Nevers, 1594, pp.87-90; *La Chronique d'Enguerran de Monstrelet*, t.5, pp.301-307; J. Chenu, *Recueil des Offices de France (Le Cérémonial François*, pp.653-656より); A. Chartier, *Les Œuvres de Maître Alain Chartier*, S. Thiboust, 1617, pp.106-109; *Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*, pp.373-374.
- 24) «Tres excellent Roy et Seigneur, Les manans de vostre Cité Vous reçoivent en tout honneur Et en tres-grande humilité.» J. Chenu, *op.cit.* (*Le Cérémonial François*, p.654より) ; *La Chronique d'Enguerran de Monstrelet*, t.5, p.302.
- 25) «les manieres tres bonnes et bien juees» (*La Chronique d'Enguerran de Monstrelet*, p.303); «ces personnages ne parloient, ains representoient ces Mysteres par gestes seulement.» (J. Chenu, *op.cit.* (*Le Cérémonial François*, p.655より) )
- 26) J. Chenu, *op.cit.* (*Le Cérémonial François*, p.655より) ; *La Chronique d'Enguerran de Monstrelet*, t.5, p.303.
- 27) «le jugement qui seoit tres bien, car il se iouoit deuant le chastellet où est la iustice du Roy.» (G. Le Bouvier, *op.cit.*, p.89)
- 28) «depuis ladite porte aux Peintres tout fut tendu à ciel jusqu'à Notre-Dame de Paris» (*Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*, p.373)
- 29) Récit anonyme, Bibliothèque de Lille, Ms. 538, fol. 221-225 (B. Guinée et F. Lehoux, *op.cit.*, pp.86-92より); *Le Cérémonial François*, pp.179-181; *Histoire du roy Louis XI autrement dite la Chronique scandaleuse (Le Cérémonial François*, pp.181-183より) )
- 30) Récit anonyme (B. Guinée et F. Lehoux, *op.cit.*, p.87より) )
- 31) «de laquelle par engin descendirent deux Angelets droit dessus le Roy, & luy poserent une Couronne sur son chef, puis remonterent en leur nef.» (*Le Cérémonial François*, p. 180) 『ルイ十一世史』では「マストの上部は百合のような形をして、そこから二人の天使に導かれて王服姿のひとりの王が出てくる。」«à la hune du mast de la nef qui estoit en façon d'vn lys, yssoit un Roy habillé en habit Royal que deux Anges conduisoient.» (*Histoire du roy Louis XI autrement dite la Chronique scandaleuse (Le Cérémonial François*, p.183より) )
- 32) «estoit faite la prise de la Bastille de Dieppe» (*Le Cérémonial François*, p.180)
- 33) *Histoire du roy Louis XI autrement dite la Chronique scandaleuse (Le Cérémonial François*, pp.671-672より) )
- 34) «estoyent representez de beaux personnages» (*ibid.* (*Le Cérémonial François*, p.671より) ) その後王妃はノートルダムで祈りを捧げて船に戻り、セレストン (パリ右岸) で下船して「とても見

事な人物」«moulte beaux personnages»を見て、トゥールネル宮まで行くが、ここでも「とても見事な人物」«moulte beaux personnages»に迎えらる。これらは無言劇ではないかと思われる。

- 35) ユゴーはこの聖史劇の作者をグランゴールとジャン・マルシャンとするがそのような記録は残っていない。そもそもこの1482年にはグランゴールはまだパリに来ていないはずである (F. Lévecque-Stankiewicz, *Pierre Gringore (v.1475-v.1538) homme de lettres, de théâtre et de cour, être auteur au XVIe siècle*, t.1, pp.210-219. これはマザリンス図書館司書の Florine Lévecque-Stankiewicz がフランス国立古文書学校に2009年に提出した博士論文である。未刊であるが Lévecque-Stankiewicz 女史のご厚意で参照することができた。この場をお借りしてお礼を申し上げる)。
- 36) «aucunes Moralitez faites en divers lieux» (Extrait des Registres du Parlement (*Le Cérémonial François*, p.673より))
- 37) *Histoire du roy Louis XI autrement dite la Chronique scandaleuse* (*Le Cérémonial François*, p.674より)
- 38) *Le Cérémonial François*, pp.208-219.
- 39) «Plus auant à la Porte aux Peintres / Vis le Gallifre de Braudas, / Qui englouloit, sans nulles saintes, / Enclumes de fer à grand tas, / Denontant que tels gouliax / En France ont fait grand menagerie, / Dont plusieurs en sont au pouchas / Par le monde querants leur vie.» (*Le Cérémonial François*, pp.214-215) 「ガリッフル・ド・ブローダス」という怪物が現れる「飽食」の聖史劇のようであるがよく分からない。フランス演劇史の C. Parfaict も全く分からないという (C. Parfaict, *Histoire du Théâtre français depuis son origine jusqu'à présent*, t.II, Le Mercier et Saillant, 1745, p.176)。
- 40) *Le sacre d'Anne de Bretagne à Saint-Denis en 1492*, BnF, Rés.8° LB<sup>28</sup> 13. これとは別に15世紀の歴史家・詩人 Jean Nicolai による『フランス王妃の成聖式とパリ入市』*Sensieult le couronnement et entrée de la royane de France en la ville de Paris, fait ou mois de fevrier au de grasce mil quatre cens quatre vingtz et onze, en ceste maniere*, IN *Bulletin de la Société de l'Histoire de France*, No 4, Juillet -Août 1845, pp.111-121もある。
- 41) «Sans revenir tenir France en souffrance, / Puisque l'érmine avec le lis repose» (*Le sacre d'Anne de Bretagne à Saint-Denis en 1492*, fol. 3 v°)
- 42) 『フランス王妃の成聖式とパリ入市』では「平和」«Paix»となっている (*Sensieult le couronnement et entrée de la royane de France en la ville de Paris*, p.115)。
- 43) 『1492年のサン＝ドニにおけるアンヌ・ド・ブルターニュの成聖式』では「舟」«une navire»となっているが、『フランス王妃の成聖式とパリ入市』にある「服装品」«une parure»の方が自然であろう (*Sensieult le couronnement et entrée de la royane de France en la ville de Paris*, p.120)。
- 44) *Lentree du roi de France treschrestien Loys douziesme de ce nom a sa bonne ville de paris / ... faicte lan mil. cccc. iiiiix, et xviii, le lundi, ii. jour de juillet*, BnF, Rés.8° Lb<sup>29</sup> 19.
- 45) «fait et compose par Messeigneurs le prevost et eschevins de la ville de paris.» (*Ibid.*, fol. 3 r°)
- 46) «avoient fait les gouverneurs et confreres de la confrairie de la Passion» (*Ibid.*, fol. 4 r°-4 v°)
- 47) «messeigneurs de la chambre des comptes avoient fait faire» (*Ibid.*, fol. 5 r°)



- 48) L. Petit de Julleville, *Histoire du théâtre en France, Les mystères*, t.2, Hachette, 1880, pp.200-201.
- 49) 1504年11月20日のアンヌ・ド・ブルターニュ王妃についてはアンヌ王妃に仕えたアンドレ・ド・ラ・ヴィーニュによる「記録」Waddesdon Manor ms. 22 (Pierre Gringore, *Les Entrées royales à Paris de Marie d'Angleterre (1514) et Claude de France (1517)*, édition par C. J. Brown, Droz, 2005, Appendice II) と『パリ市当局記録』*Registres des délibérations du Bureau de la ville de Paris*, t. I, 1499-1526, par F. Bonnardot, Imprimerie nationale, 1883, pp.93-97がある。1514年11月6日のマリー・ダングルテル王妃の入市式については、グランゴールによる「記録」写本 British Library Ms. Cottonian Vespasian B.II. と、作者不詳の「報告」と思われる版本 *Lentree de tres excellente Princesse dame Marie Dangleterre* が6点ある。A版 BnF Res. Lb2951a、B版 BnF Res. Lb2951、C版 BnF Res. Lb2951c、D版 BnF Res. Lb2951b、M版 Bibliothèque Mazarine Rés 35484、G版 *Le Cérémonial françois*, pp.731-736で、これらのヴァリエーションには特に重大なものはないが、使用された木版画が異なるところが興味深い。このことは既に紹介したことがある（拙論「ピエール・グランゴールによる1514年パリ入市式」『CORRESPONDANCES コレスポンダンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』朝日出版社、2020年所収、p.6）。1517年5月12日クロード王妃については、グランゴールによる「記録」Bibliothèque municipale de Nantes, Ms. 1337 Fonds Lajarriette（これには細密画はない）の他に写本が6点と版本が1点残されている。全ての写本を披見していないが、本論では細密画の入った二つの写本 BnF français 5750と BnF français 14116を参照した。
- 50) 1514年11月6日マリー・ダングルテル王妃の入市式については既に論じたことがある（拙論「ピエール・グランゴールによる1514年パリ入市式」）。
- 51) *Registres des délibérations du Bureau de la ville de Paris*, p.96.
- 52) 要所の舞台を写本 BnF français 14116の細密画で見えていくが、描かれた内容はグランゴールの「記録」の記述としばしば異なる。
- 53) 当然そういった疑問が生じるが、これを検証する手がかりは今のところほとんどない。例えば宰相アントワヌ・デュブラの秘書を務めたジャン・パリヨンがその日記に1517年のクロード王妃の入市式を書き残しているが、それは「たいそう厳かなものであった」*«fut fort trimphante»* の一言だけである（*Journal de Jean Barrillon, secrétaire du chancelier Duprat, 1515-1521*, t.1, par P. de Vaissière, Renouard, 1897, p.308）。また、16世紀のパリの一市民が1517年5月12日の日記に「フランス王妃でありブルターニュ公妃のクロード妃がパリに入市され、それは見事であった」*«Au dict an 1517, douziesme de may, la royne de France, madame Claude, duchesse de Bretagne, fit son entrée en la ville de Paris, qui fut très belle;»*（*Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François premier (1515-1536)*, par L. Lalanne, J. Renouard, 1854, p.56）と書くが、随行する王侯の名前を挙げて服装などに触れるだけで、要所の活人画についての記述はない。
- 54) この鳩は、聖レミギウスが改宗するフランス王クロヴィスに洗礼を施すときに聖油を運んできた鳩を思わせる。また、この鳩に聖霊を見ることもできるだろう（G. Kipling, *Enter the King*, Clarendon Press, 1998, p.299）。
- 55) 二つの写本（BnF français 5750、BnF français 14116）には林檎の話は出てこない。鳩は天から舞

い降りて加えていた黄金の冠を舞台中央にいる王妃姿の女性の頭に載せてまた天に戻る (BnF, français 5750, fol. 36 r°-36 v°; BnF, français 14116, fol. 29 v°)。しかし、この二つの写本の細密画には林檎らしきものが描かれている。

- 56) «furent faitz par les maistres de la Confrairie de ladicté Passion» (Pierre Gringore, *op.cit.*, Appendice II, p.246)
- 57) «les confreres de la Sainte passion et resurrection de nostre Sauveur et redempteur iesucriste firent faire» (British Library, Ms. Cottonian Vespasian B.II., fol. 6 v°)
- 58) Bibliothèque municipale de Nantes, Ms. 1337 Fonds Lajarriette, fol. 9 r°-9v°
- 59) Pierre Gringore, *op.cit.*, Notes, p.185.
- 60) この「子ども」は、BnF français 5750では「テタルス」«tetallus» (BnF, français 5750, fol. 41 r°)、BnF français 14116では「タンタルス」«tantalus» (BnF, français 14116, fol. 34 r°)。また、この入市式を他の写本から転記した『フランス儀典』には「アマタヌス」«Ammatanus»の名がある (*Le Cérémonial François*, p.757)。
- 61) «Quicunquez bibunt ex tantali phiala participes periculorum cum amicis esse oportet. theof Octavo» (Bibliothèque municipale de Nantes, Ms. 1337 Fonds Lajarriette, fol. 10 r°)
- 62) «furent faiz par les Frepriers» (*Registres des délibérations du Bureau de la ville de Paris*, p.97)
- 63) ここにフランソワ一世と王太后ルイーズ・ド・サヴォアの関係を読み取ることもできる (Pierre Gringore, *op.cit.*, Notes, p.190)。
- 64) «la genealogie du costé maternel» (Bibliothèque municipale de Nantes, Ms. 1337 Fonds Lajarriette, fol. 15 v°)
- 65) BnF, français 5750, fol. 44 r°; BnF, français 14116, fol. 36 v°
- 66) グランゴールの「記録」にはノートルダム大聖堂の宣誓について記載がないので分からないが、二つの写本ではノートルダム大聖堂で宣誓してから王宮前で舞台を見たことになっている (BnF, français 5750, fol. 45 v°-48 v°; BnF, français 14116, fol. 37 v°-39 v°)。なお、『フランス儀典』ではそうではなく王宮前の舞台を見てからノートルダム大聖堂に向かった (*Le Cérémonial François*, p.757)。
- 67) «Lectulus noster iusticie floridus est» (Bibliothèque municipale de Nantes, Ms. 1337 Fonds Lajarriette, fol. 16 r°)
- 68) Bibliothèque municipale de Nantes, Ms. 1337 Fonds Lajarriette, fol. 16 v°-18 v°
- 69) 正しくは『黙示録』2章の9。
- 70) Pierre Gringore, *op.cit.*, Notes, p.193.
- 71) このことは他で結論とした (拙論「ピエール・グランゴールによる1514年パリ入市式」、pp.17-18)。
- 72) Bryant も1517年の入市式におけるサン＝ドニ門とボンソーの繋がりを指摘している (L. M. Bryant, *op.cit.*, p.145)。
- 73) かつてマザリヌ図書館で Florine Lévecque-Stankiewicz 女史 (注35) と意見交換した際に、グランゴールが関与したのはパリ市出納記録から考えればやはりシャトレだけだと思うと彼女は言った。議論の機会があればこの結論をぶつけてみたい。

## La cérémonie royale d'entrée à Paris et Pierre Gringore

HIRATE Tomohiko

Depuis la fin du XIV<sup>e</sup> siècle jusqu'au début du XVI<sup>e</sup> siècle où Pierre Gringore a monté ses tableaux vivants avec un charpentier Jehan Marchand, on connaît les sept cérémonies royales d'entrée à Paris par les documents qui nous transmettent le détail de leurs tableaux vivants : Isabeau de Bavière en 1389, Henri VI et Catherine de France en 1431, Charles VII en 1437, Louis XI en 1461, Charles VIII en 1484, Anne de Bretagne en 1492, et Louis XII en 1498. On peut constater dans cette tradition une évolution sous forme d'un passage du concret à l'abstrait, en d'autres mots, du simple au compliqué avec l'usage d'allégories. En même temps, on y remarque une augmentation des allusions à des événements contemporains destinés à louer le roi et la reine. Par ailleurs, un ou des mystères sont régulièrement montés à la Trinité; on trouve une fleur de lys, blason de France, qui orne surtout la Fontaine de Ponceau; la Porte de Saint-Denis, qui est littéralement l'entrée de la ville de Paris, a été armoriée d'une nef, blason parisien, depuis la cérémonie d'Henri VI et Catherine de France en 1431.

Si on compare avec cette tradition les trois cérémonies royales d'entrée à Paris auxquelles Gringore aurait pris part, la première cérémonie organisée pour Anne de Bretagne en 1504 s'y conforme pour l'essentiel. Quant à la deuxième de Marie d'Angleterre en 1514, elle en conserve certains traits, comme le blason de Paris mis à la Porte de Saint-Denis, ou les mystères de la Trinité, mais on peut y noter quelques ressemblances dans les tableaux vivants entre la Fontaine de Ponceau, la Porte aux Peintres et le Châtelet. La dernière cérémonie, celle de Claude de France en 1517, est très différente. Elle nous paraît plutôt en rupture avec cette tradition et elle est cohérente comme si cette cérémonie était chorégraphiée par une personne unique : «une pomme» comme dispositif à la Porte Saint-Denis et à la Fontaine de Ponceau, les allégories de «Concorde» et «Union» utilisées à la Trinité en même temps qu'à la Porte aux Peintres, l'érudition de l'Ancien Testament et de Rome antique étalée à la Porte aux Peintres, à Saint Innocent et devant le Palais, et la belle conclusion d'une cérémonie devant le Palais. Bien que *les comptes et ordinaires de Paris* affirment que Gringore a «fait et composé le mystère» avec Jehan Marchand au seul Châtelet, on peut supposer avec vraisemblance que c'est bien Gringore qui a organisé toute la cérémonie de Claude de France en 1517.